利尻富士町青少年健全育成町民会議広報

きずな

第70号
2023年
3月発行

冬休み体験教室

夏休みチャレンジ教室

目次

●利尻富士町学校支援地域本部事業 …… 2
●放課後子ども教室推進事業 …… 2
●夏休みチャレンジ教室／冬休み体験教室 … 3
●第36回読書感想文コンクール優秀作品…… 4
●利尻富士町PTA連合会研究大会…… 8
●編集後記 …… 8

町Ｐ連大会

「ノーゲームデー」とは?

電子メディアとの過度な接触時間を見直すなど、子どものネット利用も含めた望ましい生活習慣の定着を目指した取組です。

第１・第３日曜日の月２回は、スマートフォン等を使ったゲームなどから離れて、「家族の団らん」を大切にしたり、「体験活動」や「読書活動」などに親しんだりすることを道民に呼びかけることを趣旨としています。

地域で取り組む青少年育成の輪

令和4年度　利尻富士町学校支援地域本部事業

学校の要請により毎年、子どもたちの健やかな成長のために、地域ボランティアの皆さんにご協力いただいています。

※事務局では、新たなボランティアを募集中です。
自分の特技や学んだことをぜひ生かしてみませんか？
たくさんの方のご連絡をお待ちしています。

令和4年度の派遣内容

【鴛泊小学校】
- １・２年生の朝読書時間への読み聞かせボランティア派遣（令和４年４月～令和５年３月）
- 新入生下校指導ボランティア派遣
- 社会科授業指導（りっぷ館、利尻島郷土資料館見学）
- スキー授業への補助者派遣
- 総合学習授業指導（利尻島の歴史、利尻の観光）

【鴛泊中学校】
- 総合学習授業指導（野外学習ポン山散策と観察）
- 柔道授業への有段者派遣（２回）
- バドミントン部活動指導
- バドミントン大会外部コーチ派遣
- 卓球部活動指導

【利尻小学校・鬼脇中学校】
- 国語・社会科授業指導（利尻島郷土資料館見学）
- 柔道授業への有段者派遣（３回）
- バドミントン部活動指導
- バドミントン大会外部コーチ派遣

遊び、まなび、ふれあえる場をみんなで

放課後子ども教室推進事業

放課後子ども教室は、放課後や週末、夏休み・冬休みなどに、安全・安心な子どもの活動拠点（居場所）を設け、地域のみなさんがコーディネーターや協働活動支援員となって、子どもたちに学習機会やスポーツ体験、交流活動などさまざまな機会を提供し運営されています。

平日放課後子ども教室

■日　程／令和４年４月～令和５年３月（平日）
■会　場／鴛泊小学校・鬼脇公民館
■登　録／町内小学生 43名
■運　営／地域コーディネーター 2名
　　協働活動支援員 3名

R•ふじっ子クラブ活動

◆１日ふじっ子教室
◆水泳教室 54名【指導者：柴田　瞳】
◆鴛泊バドミントン教室　4名【指導者：工藤真司】
◆鬼脇バドミントン教室　9名【指導者：工藤潤生】
◆鬼脇かるた教室　7名【指導者：愛好会】
◆南浜獅子神楽子ども教室 12名【指導者：保存会】

夏休みチャレンジ教室

8月8日（月）～11日（木）　小中学生 20名参加

本事業は、子どもゆめ基金の助成を受け、北海道教育大学旭川校の協力を得て行われ、短期集中講座を実施することにより教員をめざす学生とのふれあい、自然とのふれあいを持ち、学ぶ意欲がある子どもたちに対し、学習機会や様々な体験を提供することをねらいとした事業です。

新型コロナの影響で中止が続いておりましたが、今年は規模を縮小し、3年ぶりの開催となりました。

4日間の活動メニューは、学習支援として夏休みの課題取組、苦手教科克服、大学生考案のスポーツ体験やお楽しみレクです。

工作では、『海藻押し葉』を使ったキーホルダーやしおりなど、個性あふれる素敵な作品ができました。

その他にも水鉄砲遊びや海水浴、遺跡発掘体験ではいくつかの出土品を掘り出しました。

恒例のお泊りキャンプは実施できませんでしたが、快晴の青空の下、運動会ではチーム一丸となり、大いに盛り上がりを見せました。

今後も事業の継続に向け、大学や地域との連携をより一層充実するために学生や地域ボランティアの確保に努めるなど、更なる事業の充実を図っていきたいと思います。

National Institution For Youth Education
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

「子どもゆめ基金助成活動」

体験の風をおこそう

冬休み体験教室

1月12日（木）～13日（金）　小学生 5名参加

本事業は、冬休み期間を利用し、様々な体験活動の機会を設け、他者と通じ合い創造していく力を育むことをねらいとしています。

今回もボランティアとして鴛泊中学校生2名、利尻高校生3名に参加をしていただきました。

活動内容は、宗谷地区水産技術普及指導所利尻支所より2名の指導員にお越しいただき、ニシンに関する講話とお魚クラフトを制作。教育委員会による毛糸工作を行いました。

学習支援では冬休みの課題や苦手教科克服への取組。他にも、2組のチームに分かれ「リバーシ＋神経衰弱」「スポーツリバーシ」の対抗戦や、4人のリーダーがドラフトでメンバーを集め行った「ゲット3ボール」（ボール集めゲーム）の3種類のスポーツ体験をしました。

最終日にはALTのジェシーによるスポーツを通じた異文化との触れ合いを計画していましたが、残念ながら中止となってしまい、急遽中高生ボランティアによる全体レクを行いました。校内かくれんぼ、紙芝居の読み聞かせやドッチボールをして全日程が終了しました。

これからも子ども達にたくさんの体験や地域住民との触れ合いの場を企画していきたいと思います。

第三十六回 読書感想文コンクール優秀作品

【小学校一学年の部】

「きょうふのおばけやしき」をよんで

鴛泊小学校　大　関　夕　楓

わたしがこのほんをえらんだりゆうは、おもしろそうだったからです。

きゃべたまたんていたちがおばけやしきにいきました。

こころにのこったところは、おばけやしきにおばけがでたところがこわそうだったからです。

じぶんだったら、おばけやしきにはいきません。

【小学校二学年の部】

「先生、感想文、書けません！」

鴛泊小学校　岡　田　啓　児

「読書かんそう文を書きたくないなあ。」と話していたら、夏休みにさっぽろに行った時におじいちゃんがこの本をプレゼントしてくれました。

かんそう文が書けないみずかが、友だちのあかねと自分たちでおもしろい本を作って、その本でかんそう文を書くお話です。「あかねおねえちゃん、がんばる！」というだい名で、あかねが弟のタクちゃんのピンチを何どもすくっていました。

タクちゃんが大ダコにたべられた時はびっくりしました。

かぞくや自分いがいの人を大切におもうことを、みずかが「あい」と言っていてすてきだな、とおもいました。

おもしろい本を読むと「よかったなあ、おもしろかったなあ」、かわいそうな話は「かわいそう」しか書けないにきまってると言ったみずかとぼくも同じ気もちです。

さいごのみずかのかんそう文にはいろんな気もちが書いてありました。

ぼくは学校で友だちとマンガを書いたりしていたから、みずかとあかねの作ったお話をこうかんして読みあいたいです。

ぼくもみずかみたいにおもしろいかんそう文が書けるように、いろいろな本を読みたいです。

【小学校三学年の部】

「みんなのためいき図鑑」を読んで

鴛泊小学校　小野寺　雫

この本は、「たのちん」という男の子が、クラスの班で、ためいきの図鑑を作るお話です。

ためいきは、つかれた時や面どうくさい時に出ると思っていたので、この図鑑にはどんなためいきがのっているのか気になりました。

わたしがよくためいきをつく時は、ゲームをしていておてつだいをたのまれた時や、しゅくだいがいっぱいある時です。

たのちんには、友達の「かせどうさん」が書いてくれた絵からとび出した、「ためいきこぞう」がいます。もし、わたしのためいきこぞうがあらわれたら、「どうしてためいきがでるの？」と聞いてみたいです。

この本のおもしろかったところは、たのちんのお母さんが、「これは、何のためいきでしょう」と、クイズを出しているシーンです。

やきそばのめんを買いわすれた時のためいきや、ほしいふくを見つけたのに高くて買えない時のためいきなどがあって、おもしろいし「なるほどな」と思いました。

たのちんの班では、図鑑の絵を書きたい人が二人いましたが、どちらもゆずらずにケンカになってしまいました。そこで、たのちんが二人の間に入って話し合いができるようにしました。

わたしのまわりでももしケンカをしている友達がいたら、たのちんのようにしてあげたいと思いました。

わたしは、さいしょはためいきをつくことによくないイメージがありましたが、さいごにかんせいしたためいき図鑑を見ると「ためいきは体をリラックスさせることができるのでしてもいいよ」と書いてあり、いいこともあるんだなと思いました。

【小学校四学年の部】

「いのちのすくいかた」を読んで

鴛泊小学校　国分七南

表紙の子犬が、とても悲しそうな目でこっちを見ているのが気になって、この本をえらびました。

作者は、すてられた犬やねこが、この後どうなるか知りたくて自分で調べて本にしていました。すてられた犬やねこは、地いきで言い方はちがうけれど、動物収容し設という所に収容されて、飼い主が迎えに来なかったら、何日か後に殺されてしまうそうです。

すごくびっくりしたのが、一年間で殺しょ分される動物の数。犬は約三万頭、ねこは約十万頭と書かれていて、とても悲しくなりました。すてる理由は、言うことを聞かないから、くさいし部屋をよごすから、あきたから、かわいくないからなど、人間の勝手な理由で、なんでこんな人達にかわれてしまったんだろうと思いました。人間の子どもなら、大変でも、かんたんにすてるはずないのに、どうして動物はすてていいという考えになるのか分からないし、かい主にすてられて殺されるなんて、かわいそうでキューッと苦しくなりました。動物だってもっと生きたいはずなのに、言葉がしゃべれないから、小さな動物の目が、助けてほしいって言っているような気がします。

すてられた犬やねこを助けるのに、最後まで家族としてくらすのは当たり前だけど、動物収容し設で、新しいかい主をさがす取り組みがあるということを知りました。病気などがないか調べて、じょうとこうほ犬というのにえらばれたら、新しいかい主にかってもらえるかもしれないチャンスがあるみたいで、私はすごくうれしくなりました。

私が一番心に残ったところは、表紙の子犬のクウに新しいかい主が見つかったことです。すごくうれしくてジーンとしました。クウは、大好きなお母さんや兄妹とはなれて悲しかったと思うけど、新しい家族ができて、きっと幸せな毎日を送っているんだと思うとうれしいです。

私は動物が大好きで、大きくなったら動物に関わる仕事をしたいと思っているので、この本を読むことができて良かったです。

私の家にも、十一歳になる愛犬がいます。もうおじいちゃんで、大変なこともふえてきたけど、かわいくて仕方ないです。こんな大切な家族の命をぜったいにすてられないし、話せない分、ちゃんと見てあげないといけないと思います。私の家に来て良かったと思ってもらえるように、これからも大切にしていきます。

【小学校五学年の部】

「愛と不思議にみちた動物の世界」

利尻小学校　寺島信源

ぼくが、この本をえらんだ理由は、愛と不思議というきれいなひびきの言葉にきょう味を持ったからです。

この本には、人と動物がどちらも心を持っているということが書かれています。

中でもぼくが心に残ったお話が、三つあります。一つ目は、ワニが自分の子どもを守るお話です。ぼくはこの話を読んで、子どもを守ろうとする心がワニにもあるんだなと思いました。ワニはこわい一面もありますが、子どもを守ろうとする一面があるということを初めて知って、とても意外でおどろきました。

二つ目は、イルカが船から落ちた人を助けるお話です。ぼくはこの話を読んで、イルカは死にそうな人を助けようとする心を持っているんだなと思いました。イルカは人のうでをかみちぎれるほど、あごが強いのに人にはかまないで逆に助けようとする心があることを知って意外で不思議に思いました。

三つ目は、のらねこと仲よくしていた家族がひっこしてしまいましたが、なぜかそこにのらねこが訪ねてきて子ねこを置いていくお話です。ぼくはこの話を読んで、ねこは一度愛した人をわすれないという心を持っているんだなと思いました。のらねこは人をひっかいたりするのに、のらねこが人を愛すことなんてあることを初めて知りました。ぼくも家でねこをかっていますが、ぼくがいすにすわるとひざの上にのっかってきてくれます。

ぼくは、この本を読んで動物にも愛や心があるんだなと、あらためて思い感動しました。この世界にはだいたい百万種ぐらいの動物がいるので、もっと動物の愛や心のことを知りたいです。そして不思議のことも知りたいです。

この本を読むと動物たちの生活や体の仕組みが、よく分かります。さまざまな新しい発見がありとてもおもしろいのでぜひ読んでみてください。

【小学校六学年の部】

「やっぱり野球が好き!!」

鴛泊小学校　中　山　智　晴

ぼくは、『はるかなる甲子園』という本を読みました。なぜこの本を選んだのかというと、この本を書いた栗山英樹監督がおっしゃっていた「好きなことを大事に」という言葉が忘れられなくて、もっと知りたいと思ったからです。

この本には、栗山英樹監督が、甲子園の解説をしていて、心に残った高校野球のエピソードが書かれています。

色々な話があるなかで、ぼくが一番心に残った場面は、興南高校・我喜屋優監督が目指す「選手の育て方」という話です。

高校一年生から野球を始めた我喜屋監督は、球拾いで三年間終わるかもしれない、でもまずそこを必死でやろうじゃないかと、出来ることに全力を尽くしました。

ぼくは、バッティングの練習は好きですが、球拾いのような仕事はあまり好きではありません。疲れていて、だれか拾ってくれないかなと思ってしまうことがあります。

でも、我喜屋監督は、球拾いにも、自分で意味を見いだしました。やらされてやるのではなく、できるだけ早く、人より多く拾い、それも練習の一つと考え、取り組んだことで信頼される選手になりました。

また、我喜屋監督は「小さいところに気付く子は大きな仕事が出来る」とも言っています。

ぼくは、小さなことに気を配ることが苦手です。練習の時、自分より先に周りの人がゴミを拾ったり、グローブの向きを整えたりしているのを見て、はっと気づくことが多くあります。

でも、やはりそれができる人は、試合でも良いプレーができると思います。小さなことでもすぐに動けるというのは、決められた練習時間に全力をつくして、集中できているということにつながるからです。

このように、細かい部分までこだわって、目標に向かって努力することは、簡単にできることではありませんが、とてもかっこいいことだと思います。

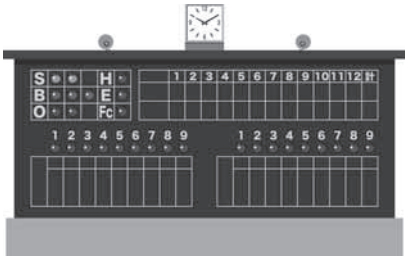
ぼくは、この本を読んで、変わったことがあります。それは、甲子園の見方です。今までは、ただなんとなく、テレビで入っている試合を見ているだけでした。

でも、試合に出てくる選手、ベンチにいる選手、アルプスで応援している選手、一人ひとりが小さいことを積み重ねて甲子園の場に立っているのだということがわかり、見ていて心が熱くなるようになりました。

自分の少年団の練習も一緒です。一日一日を大切にしたいと思えるようになり、道具の手入れも丁寧にするように心がけています。

栗山英樹監督とこの本に出会って、ぼくは今まで以上に野球が好きになりました。この気持ちを信じて、野球を好きでい続ける喜びを教えてもらったことは、ぼくにとって宝物です。

今年、ぼくは少年団最後の年です。最後には、胸をはって楽しかったと笑えるように、自主練習もチームの練習も、小さなことにも全力でがんばります。



【中学生の部】

「不滅のワイルズ」を読んで

鴛泊中学校三年　寺　田　は　な

『不滅のワイルズ』は、T細胞型急性白血病を高校一年生で再々発した十七歳の少年が、数学者アンドリュー・ワイルズの精神に共鳴し、「ワイルズ」の名で闘病生活を記録したものである。

この世界には、今も病気で苦しんでいる人が多くいて、ワイルズもその中の一人であった。ワイルズは、白血病により病院での生活が多く、学校にも行けず、家にも帰れない、外にも出られないという状況が続いた。そして彼は外に出て、家で暮らし、学校に行くことを望んでいた。病院では話し相手も医者か看護者か親がほとんどであり、彼にとって学校で友人と遊ぶことが一番楽しい時間であり、ストレスの発散ができる時間でもあったからだ。そんな彼の生活をとても恵まれていると感じた。

朝起きて眠い中、学校へ行き、友人と話して勉強し家に帰る。そして、時には友人や家族とぶつかり合う。そんな生活が私の中で当たり前だった。けれど、私はそんな私の中の当たり前の生活も幸せ

を感じることが難しく、苦痛を感じながら生きなければならなかった。また、私にはまだ余裕があって、やりたいことがその日にできなかったらまた次の日にやればいいと思える。しかし彼は、病気が悪化して、やりたいことが次の日にはもう出来なくなってしまっている可能性があるのだ。これらのことから、私は自分の今の生活が当たり前ではないと思って、普段関わる人達にもっと感謝をして、もっと関わっていき、また、今出来ることでやりたいことに挑戦していきたいと思った。

　ワイルズは十七年と半年という短い人生での九年一ヶ月という半分以上を白血病と向き合った。その上彼は、最期の瞬間まで諦めず、様々な苦痛を耐え抜き、限界まで戦い、生き続けたのだ。それは彼だけではなく、今でも病気と闘っている人がいる。私は、このことを忘れずに、普段の日常に感謝し、努力を怠らないで諦めずに精一杯生きていきたいと思った。

　彼は「死」について、「今の教育では死について子ども達は全く理解できていない」、「特別なことでも、恐れるべきことでも、辛いことでも、苦しいことでもない、ということを教えてほしい」という言葉を恩師達へ残した。私達はもっと「死」について考えるべきではないだろうか。そして、かつて笑いながら自分の葬儀を指示し、遺書を書いた子どもがいたことを皆さんにも知ってほしいと思う。

「余命10年」を読んで

鬼脇中学校三年　牧野泰夏

　もしも、今この瞬間に余命宣告をされたらあなたはどう感じるだろうか。もしも、あと十年しか生きることができないと言われたら残りの十年をどう生きるだろうか。僕が余命宣告をされて、残り十年しか生きることができないとなったら僕はどう生きるのだろうか。

　小坂流加さんが書いた『余命10年』を読んで僕はこんなことを考えるようになった。

　僕が残り十年しか生きることができないと余命宣告されたら、僕は自分がやりたいと思っていることをすべてやり尽くすだろう。たとえそれがどんなに難しいことであっても、たとえそれがほんのちっぽけなことであっても。家族と大きな旅行に行く、友達と遊びまくる、海外旅行に行く、一人の時間を有意義に過ごす。他にも数え切れないほどあるがそれをすべて叶えようと努力するだろう。

　この本は数万人に一人という不治の病にかかり、余命が十年であることを知る主人公の茉莉。笑顔でいなければ周りが追いつめられる。何かをはじめても志半ばで諦めなくてはならない。残り少ない人生の中で生きることに執着しないため、彼女は恋だけはしないと決めていた。そんな中、彼女は同窓会でかつての同級生の和人と再会する。これをきっかけに二人は急接近、茉莉はもう会ってはいけないと思いながらも、自らの病気を隠して、どこにでもいる男女のように和人と楽しい時間を重ねていく。思い出が増える度に、少なくなっていく残された時間。二人は最後にどんな道を選ぶのかというお話である。

　原作者の小坂流加さんは本作の主人公と同じ難病、原発性肺高血圧症を抱えていた。それを知った僕はこの本を読み続ける度、気づかないうちにどんどん本に感情移入していた。

　十年は長いように見えて短いのではないか、あっという間に過ぎてしまうのではないか。茉莉は十年の中で何を考えていたのか、どんなことを思って生きてきたのか。この本の中には「さあそろそろ。死ぬ準備を始めなくては。」と綴られているところがある。その場面を読んだとき、僕はどうしても生きられないのだろうかととても悔しい気持ちになった。この世の中には病で悩んでいる人はたくさんいる。なんとか治せないのか、どうにかして生きさせてあげられないのだろうか、僕だったらどんな言葉をかけていたのだろうか。この言葉でたくさんのことを考えさせられた。余命宣告はいつ、誰に起こるかわからないことだ。僕とは程遠いものではなく、とても身近に感じてしまうほど、このセリフが一番心に残っている。

　命についてどう考えるのか、自分なら残り少ない人生をどう生きるのか。普段なら当たり前に生きているこの生活に対しての考え方が、この本を読んでから少し変ったような気がする。この素晴らしい作品がたくさんの人の目について、この世の中を生きている人みんなが命について、今生きていることが当たり前ではないことを知った上でどう生きるのか。ほんの少し知りたいと思った。

利尻富士町PTA連合会研究大会「教育講演会」

11月４日(金)に利尻富士町総合交流促進施設「りぷら」を会場に、２年ぶりに研究大会「教育講演会」が開催されました。

講師に中頓別町教育委員会教育長である相座豊氏を迎え、『「人育ち」を応援する～まちがえても、叱られても大丈夫～』と題して、講演を行っていただきました。

相座氏は30年以上教員として（本泊小学校でも勤務されていました）過ごし、その後教育長になられました。また、一家の大黒柱として子育てにも奮闘されていました。

その経験から子育てについて感じたことや考えを、わかりやすく語っていただきました。子どもに関わるすべての人たちの心に響く、貴重な時間となりました。「もっと聞きたい」という声があったことはもちろんですが、「なかなかない機会なので、色々な人の話を聞いてみたいと思った」といった意見もいただきました。

お忙しい中、遠く利尻富士町まで来ていただき、相座氏には感謝しかありません。また、想定したよりもたくさんの方々に会場まで足を運んでいただきました。コロナ禍の中でなかなか集まる機会がありませんが、このように学び合えたことは、本当にうれしいことです。来年度もまた皆様と共に学び合いたいと思います。

参加者の声

- 怒らずに子どものことを信じるという考え方を、さっそく自分の子育てで実践しています。（なかなか思ったようにはいきませんが…）
- 子育てについて悩んでいることは、大なり小なり誰にでもあるのだと思うと心が軽くなりました。とても参考になったので、来年の講演も楽しみです。

編集後記

三年ぶりに「広報きずな第七十号」を発行することができました。編集に携わった広報委員の皆様をはじめ、関係された皆様に深くお礼を申し上げます。

さて、利尻富士町青少年健全育成町民会議が発足されて、今年度で三十六年目となりました。小・中学校・高等学校の在学青少年を健全に育成するために、関係する全ての機関および地域全体で子どもたちに関わっていくための会議（組織）です。

この歴史ある利尻富士町青少年健全育成町民会議ですが、令和二年二月頃から猛威を振るった新型コロナウイルス感染症のために大きな影響を受けてきました。特に令和二年度と三年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、主催事業の全てを中止にしなければなりませんでした。

しかし令和四年度は、感染症対策に努め、規模を縮小しながら少しずつ事業を再開することができました。「夏休みチャレンジ教室」、「冬休み体験教室」をはじめ、その他の共同事業、協賛事業を開催しました。企画・運営に携わった関係者の皆様、参加された皆様にあらためて感謝いたします。

「ウィズコロナ」、「アフターコロナ」という言葉も定着してきたように感じます。今年の五月には、新型コロナウイルスの感染法上の位置づけを「五類相当」へと引き下げる方針が政府から出されました。今後は、社会情勢の変化や新しい時代に対応し、子どもたちを健全に育成していく取組がより一層、求められてくると考えます。地域の皆様がアイディアを出し合い、利尻富士町青少年健全育成町民会議が益々発展していくことを期待しています。

広報委員会委員長
米田 達雄

編集・発行／利尻富士町青少年健全育成町民会議広報委員会（事務局／教育委員会 ☎82－1370）